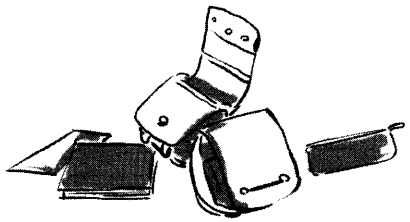
宮坂静生推薦　岳　4月

ホスピス病棟大寒のチェロ沸けり　唐澤南海子
背のリュックくるりと胸に初電車　栗原利代子
首柔くして白鳥の争はず　篠遠良子
紅梅やひとりとなりし吾に咎　許勢元貞
止まる時色戻り来る独楽（こまつぶり）　窪田英治
鱈を煮る匂ひやふたり恙なし　渡辺真帆
成木責青空に罅走るまで　滝澤あや
春霞瀬戸内巡る診療船　田添博美
節太の十指を恃み庭乾く　山本豊子
福笹へほのかに夜気の降りきたる　海野恵子
春立つや打ちて鳴る物みな楽器　木村由里子
寒四郎最終便は玉兎まで　芳川莞久子
冬潮のさらふ珊瑚の骸かな　竹岡みち子

*

水子には無き戒名や鯨墓　長尾裕美子
鮟鱇をどんどん捌く那珂湊　牧野繭



舌伸ばし舌を鍛へる春隣　田中優子
炭を継ぐごと駅伝の襷かな　古屋　洸
雪晴や鯉屋に水音響きをり　満田光生
手拍手は楽器のひとつ冬銀河　坂本昌子
怪しげな気球ふらふら霾れり　荒木　仁
一瞬を逃さじぐいぐいと初日　秋野美津子
チンパンジー背に子の骸冬椿　中溝玲子
看護師の勤務さなかの除夜の鐘　大﨑弘子
棒となる鯉の開き風二月　坪内みか
ちんころ餅小言納めに飾りけり　今井愛子
橇で行くちちの柩を追ひし日よ　司　雪絵
木枯や袂に生きものの気配　瀧澤征矢子

*

裳裾曳き川さかのぼる春の潮　竹内京子
幼年の宝の日々や春隣　牧野眞知子
お仕舞いに靴を揃えて大晦日　菊池理津子

半世紀へ ―― 岳俳句四月 524

―同人集・岳集・青雲集から

宮坂静生

巻頭のことば　「岳」四十五周年記念大会が一ケ月後に迫って来た。五年ごとに記念大会を開き、ここ三回は軽井沢の新緑をともに味わい、講演会やシンポジウムを催し研鑽を積み、かつ楽しんできた。今回は私の句碑を建立してくださるという。生涯に一基くらいはというみなさんの意向に推され、菩提寺の境内に建てて貰うことになった。参集してくださる皆さんの移動の便も考え、長野に記念大会場を決めていただいた。できるかぎり縮小してとお願いしたが、ご来賓を含め全国から三〇〇人の大勢の方々にお世話になる。申し訳ない次第です。折からコロナも終息に向かいつつあり、好季節を迎える。どうぞお元気で、お集まりいただきたい。

初電車風景―背のリュックを胸に抱く現代

背のリュックくるりと胸に初電車　栗原利代子

背に負うよりもリュックを胸に抱く。優しさを感じる。これは現代風である。赤ちゃんを背負わないで前に抱く光景を見て感心した。荷物も同じ。ただし、行動するには前の空間が狭くなるので不便であるが、車中は静止状態なのでこれでいい。

ホスピス病棟大寒のチェロ沸けり　唐澤南海子

現代ではしばしば出会う光景である。安らかに終末を迎えるためにチェロ演奏を楽しむ。音楽は気持をなだめ、透明な時間へ心を誘う。無心に思い出に浸るのもそんなときである。人生に何が大切であったか。繰り返し省みる命題である。

首柔くして白鳥の争はず　篠遠良子

柔らかとは自在なこと。白鳥の首は後ろまで届く。白鳥は不平不満がないのか、他の鳥のような争う場を見たことがない。首の柔らかさに着目した点に発見がある。

紅梅やひとりとなりし吾に咎　許勢元貞

伴侶をなくした直後は「吾に咎」意識に苛まれる。ああすればよかった。あれをしてやれなかったと後悔する。特に会社人間の猛烈社員には悔いが多い。子育てなど家庭内のこと一切は連合い任せ。これは身につまされる。自分を責めることにもなりかねない。作者はどうなのかは知らない。紅梅は樹液が滲み出た色、木が身から絞り出した色を思わせる。擬人化したいい方では内省の花である。思いの深い句である。

止まる時色戻り来る独楽　窪田英治

「こまつぶり」とは独楽の古い呼び方。独楽は孤独なのであろう。言い換えるならば、「ひとり楽しむ」とは勁い生き方でもある。呟きのような心境句である。

鱈を煮る匂ひやふたり恙なし　渡辺真帆

鱈を煮るふくよかな匂いは二人の匂い。「お二人ともお達者でなにより」といった感じ。透明感ある貴族的な匂いではない。ほんわかした庶民風な安らぎがある。作者は長岡在住。さしずめ、鱈好きな溌剌夫婦。

成木責青空に罅走るまで　滝澤あや

成木責めは小正月の風土行事。秋に実が成る木への斧改め。成るか成らぬかと責め、木に刃物を当てる。掲句はすらすら詠まれ、寒中の寒さを大袈裟な表現で暗示。

春霞瀬戸内巡る診療船　田添博美

こんな診療船があるのであろう。句材が斬新。世界周航船に飽きたドクトル北杜夫でも乗って居そうな気がする。

節太の十指を恃み庭乾く　山本豊子

庭の雪解け「庭乾く」は雪国特有の地貌季語。働き者が住む家である。指で庭中を掻きまわす。鶏のごとく。

福笹へほのかに夜気の降りきたる　海野恵子

十日戎に縁起物を付ける福笹。大判、小判、槌、俵、さな

今月の秀句

春立つや打ちて鳴る物みな楽器　木村由里子

明るく楽しい。縄文時代以来、音を作り出し、音を楽しんできた。「音楽」とは言い得て妙。板も棒も石と石も地団駄もみんな音楽。但し撃ちて鳴る武器だけはご免蒙る。

がら吊し雛のように福がぎっしり。夜気の気配に艶がある。

寒四郎最終便は玉兎まで　芳川莞久子

寒へ入り四日目が寒四郎。この日は晴天か、最終の飛行機が「玉兎」（月の世界）まで行ったという。宇宙遊泳の時代が到来到来。着想が自在の作者。

冬潮のさらふ珊瑚の骸かな　竹岡みち子

沖縄の冬か。地味な海岸風景であるが、深い自然の摂理を感じさせる。海底には珊瑚の屍がるいるい。海の墓場を思わせる。

雪嶺集・前山集から推薦候補作をあげる。

海と陸天城颪を頒かちあひ　奥山源丘
冬満月黄泉への門の開くごと　谷口とし子
敷皮に弾痕ひとつ峠の家　功刀たかね

舌を鍛えるとは―味覚の老化を防ぎ、感覚も磨くとか

舌伸ばし舌を鍛へる春隣　田中優子

意外な句材に驚く。縮む舌を伸ばして鍛える。舌に集中する味の蕾へ刺激を与える。発声のためにも舌の訓練が効果的なのであろう。現代は鍛える時代。感覚の老化が怖ろしい。

鮟鱇をどんどん捌く那珂湊　牧野繭

グロテスクな鮟鱇を一切の感情を殺して処理する。競に掛けるとも腹を開くとも取れるが大量の鮟鱇が始末されるのである。鹿島灘に面した那珂湊の盛んなさまが見えるようだ。

炭を継ぐごと駅伝の襷かな　古屋　洸

新年の箱根大学駅伝の場が思い浮かぶ。比喩「炭を継ぐ」がいい。燠になりとぼらない内に新たな炭が継がれる。襷がそれ。炭を継ぐシンボルだ。選手が炭とはユーモアがある。

雪晴や鯉屋に水音響きをり　満田　光生

音楽の曲名や演奏者などを専ら句材にした作者が「鯉屋」への着目とは珍しい。わかりやすく詠んでいる。雪晴と水音との照応も清々しい。一句にも微かに音楽性への関心がある。

手拍子は楽器のひとつ冬銀河　坂本　昌子

同想の句〈春立つや打ちて鳴る物みな楽器〉を先に紹介した。冬銀河の清冽な寒さが盛んな手拍子によく響く。

怪しげな気球ふらふら霾れり　荒木　仁

「怪しげな気球」とは不気味である。現代の世相を思わせる。ドローンが飛んだ、中国の気球がアメリカ大陸で落とされたなど話題は尽きない。霾るとは地理学上の天候に関する古くからの事項であるが、にわかに関心を持たれるようになってきた。陸ばかりでなく、空も海も不安に満ちている。

一瞬を逃さじぐいぐいと初日　秋野美津子

初日が上がる光景を捉え臨場感がある。今年初めての日の出だけによく見つめると実に力強い。「ぐいぐい」は作者が初めて気付いた太陽への意外な発見。太陽賛歌である。

チンパンジー背に子の骸冬椿　中溝　玲子

動物でも哺乳綱霊長目ヒト科、類人猿には親子の情愛が強い。知恵もあるという。死んだ子の骸を背負うさまは身につまされる動物愛。冬の椿が咲く自然動物園であろうか。薄情な人間は恥じ入るばかりだ。

看護師の勤務さなかの除夜の鐘　大﨑　弘子

大晦日でも手が離せない看取りの最中に除夜の鐘の音を聞く。それが仕事だと割り切っても、いよいよ今年も暮れるという感慨は深い。こんな場面に遭遇している人の気持を知りたいと普段思っていただけに、しんみりする。聞き終われば「おめでとう」と新年の挨拶を交わすことになる。プロの職業人の自覚からは教えられることが多い。

棒となる鰹の開き風二月　坪内　みか

鰹は近海の岩礁地帯に棲息するうなぎに似た魚。蟹や蛸を食べる肉食。ウナギ目ウツボ亜目ウツボ科という。干物にすれば棒のようだとは、作者の居住地、四万十の冬二月の風景に惹かれる。

ちんころ餅小言納めに飾りけり　今井　愛子

今月の秀句

水子には無き戒名や鯨墓　長尾裕美子

胎内から外へ出ることなく葬られる水子。生命を持ちながら闇から闇へ消される。戒名が付かない。鯨墓を長門の仙崎港で見た。鯨のお腹には赤ちゃんがいたが母鯨もろとも解体され、供養の墓が建てられていた。鯨墓への連想が人間中心思想ではない。そこに感心した。

「ちんころ餅」の名が面白い。調子がいいではないか。新潟県十日町の一月の節季市に並ぶ米の粉で作ったしんこ細工「チンコロ」と呼ぶ縁起物。雪だるまや犬や兎など。「小言納め」がいい。雪国の暮らしは雪との闘い。小言も多くなる。「今年は小言を言わない」と正月行事に小言納めがある。ちんころ餅を飾るくらいでは小言が直らないのも面白い。

橇で行くちちの柩を追ひし日よ　司　雪絵

父の柩を雪橇で火葬場へ送る。その後を慕い追う。小さい頃の回想句であるが、身に詰まされる。雪の山国風景だ。

木枯や袂に生きものの気配　瀧澤征矢子

不思議な句である。寒い木枯の吹く日には着物を着たぬくとさを「袂に生きものの気配」と具象化したものか。何か動物を忍ばせているのか。多分前者であろう。着物を着る機会が少ないだけにこの感じ方は初々しい。体感がある。

青雲集

前口上一言　今月から青雲集から岳集へ多くのメンバーに移動してもらった。一年ほどの青雲集欄での作句経験により俳句に慣れられたと判断したのである。入会初心者が岳集へ投句すると難しいといわれる。五十年のベテランと初めての初心者とが同じ欄で肩を並べることは、馴れると楽しい快感はあるが、初めは違和感を持つであろう。そこで、初心者は一年くらい、馴れるまでは青雲集で同じくらいの経験者と修練をして岳集の大海へ入ると抵抗が少ないと判断したのである。他での経験者は岳集へ投句されるように案内をしている。

裳裾曳き川さかのぼる春の潮　竹内　京子

河口から春の潮が川を逆流する光景を描いている。「裳裾曳き」が平安時代の女官が纏う十二単の裳裾を曳くようなぼったりした古典的な表現を思わせる。春だけに自然に艶がある。

幼年の宝の日々や春隣　牧野眞知子

生まれて幼稚園にあがるまでの二年から四年くらいまでの時期。親の庇護のもとで可愛がられて大きくなる。生涯の蜜月時代。「宝の日々」との素朴ないい方に愛情が籠る。もうじき春になる。幼稚園にでも入るのであろう。幼稚園に行くと友達や先生にもまれる。蜜月ではない、それとなく競争社会へ入る助走期にあたる。こんな時が私にもあったなあと回想し胸が熱くなる。

お仕舞いに靴を揃えて大晦日　菊池理津子

玄関の靴を揃える。これが今年の最後の家での仕事仕舞。こどもが言いつかったものか。終わると、お歳取りの膳に付く。些細なことであるが、確かなけじめを指摘された思いがある。間もなく新しい年がくる。

最後に岳集・青雲集から推薦候補作をあげる。

生きるとは三寒四温のやうなもの　本園　明男

病みぐせの五臓の一つ薄氷　永島理江子

北山は雨早蕨の御御御汁　平野　規子

ほこらかに立つ裸木や淑気満つ　清水　慧

滝凍てて水相貌を新たにす　青木　山彦

掌に閉ぢ込むる恋春の雪　竹野入美奈子